

計画中止に追い込まれたイージス・アショアと山口県の地元のたたかい

増山 博行、Mashiyama Hiroyuki (山口支部)

1. はじめに

防衛省は 2004 年度より弾道ミサイル防衛 (BMD) システムの整備を開始し、イージス艦の建造と 2006 年に試射が成功した迎撃ミサイル SM-3 ブロック I A の配備を進めていた。しかしこの迎撃ミサイルは短距離および準中距離弾道弾が対象であり、より高度を飛来する中距離弾道弾や大陸間弾道弾に対処できるようにと、2006 年から日米共同開発で SM-3 ブロック II A の開発に着手し、ようやく 2017 年 2 月にイージス艦から発射して準中距離弾道弾の迎撃に成功したと伝えられた。

北朝鮮によるミサイル発射実験が相次ぐ中、2014 年に防衛省はイージス・アショアを含めた技術評価を行った上で、2018 年までの中期防ではイージス艦と航空自衛隊の対空ミサイル PAC3 による防空体制を BMD の柱としていた。

ところが 2017 年春にトランプ大統領との会談で安倍首相は防衛装備品の大幅な購入を約束させられ、防衛省は急遽イージス・アショアと終末高高度防衛 THAAD の比較検討を開始した。そしてどういう議論があったかは定かではないが、米軍において実績のある THAAD ではなく、技術開発中の固定式レーダー SPY-7 を装備するイージス・アショアを検討していることが 2017 年 8 月の日米 2+2 会議で米側に伝えられ、同年 12 月には秋田と山口の 2 カ所の自衛隊演習場を設置候補地とすることが閣議決定された。

2019 年、防衛省による立地調査に不手際が発覚し地元は硬化した。加えて SM-3 の初期推進装置ブースターが周辺に降ってくることを避けるためには、10 年の歳月と、2 千億円以上の追加経費が発生すると米側から通告されるにおよび、2020 年 6 月に防衛相が計画の凍結・撤回を表明するに至った。国を守るというミサイル基地には住民の安全・安心という視点がなかったのである。

2. イージス・アショア計画とその問題点

弾道ミサイルの飛行経路と迎撃態勢を図 1 に模式的に示す。通常軌道のミサイルは打上げ加速後、宇宙空間では楕円軌道を慣性で飛び、目標地点の手前で大気圏に突入する。打ち上げ直後は速度が出ていないので撃墜しやすいとはいえ、それは敵地先制攻撃であり、国際法上も出来るものではない。目標地点付近から正面に迎え撃つように迎撃するのが THAAD や PAC3 で、撃墜率も高いという。しかし、多数の迎撃部隊を配備しないとけい、破壊した破片が落下する。これに対して、水平飛行に近い高空域で撃ち落とすのがイージス・システムの SM-3 である。

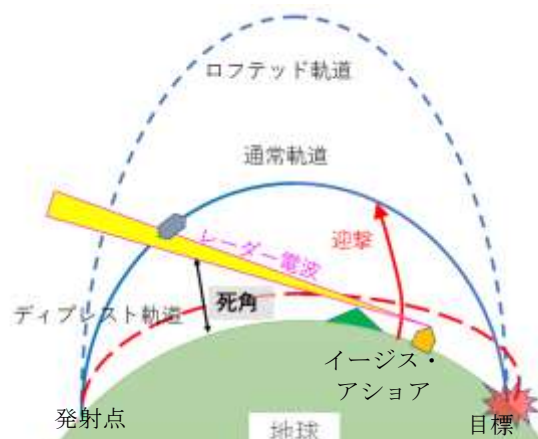


図 1 弾道ミサイルの軌道とレーダー死角

ところで、探知レーダー電波には死角がある。むつみ演習場の場合は北側の高台のため、電波の仰角は9度以上に制限される。そうすると、図2のように迎撃出来る条件が限定されることが分かる。平壤 P から東京 T に発射される準中距離ミサイルが 38 度線付近の Y 点で高度 126km 以上で日本海上空に出るとき、むつみ M のイージス・アショアのレーダーで探知され、直ちに SM-3 を発射して、日本海上の会合点 X で軌道が交差するときに撃墜するチャンスがあることになる。

しかし、高度 1000km 以上のロフテッド軌道に

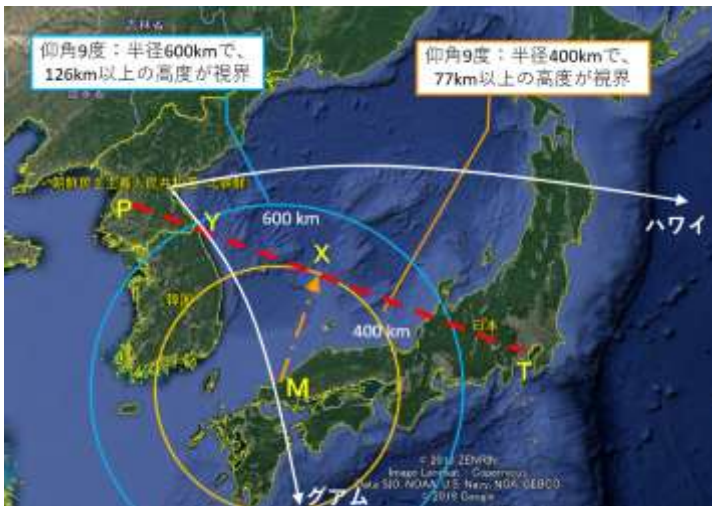


図2 ミサイル飛来経路とレーダー探知範囲

対しては追いつけないかも知れない。もっと困るのは高度 50km 以下のディプレスト軌道であり、むつみ M からは会合点 X では高度 77km 以上しか見えないからである¹⁾。要するにグアムやハワイに向かう中距離弾道ミサイルには有効かも知れないが、極超音速兵器が登場すると自らの基地を守ることに難しい。

強力なレーダー電波による電子機器への影響は基地周辺で時として起こっている。地元萩市が設置した有識者会議でもずいぶん議論されたが、結局専門家の意見は無視され、防衛省の息の掛かった座長が「概ね妥当」という答申を6月下旬の計画撤回後にまとめた。専門家会議を隠れ蓑にする行政の姿勢が問われよう。

3. 周辺住民に理解されない陸上ミサイル基地

むつみ演習場の裾野からは豊富な地下水が周辺地区の農業用水、生活用水となっている。水量や水質に農民は極めて敏感であり、強力な電波の影響を払拭する説明がなされないことと併せて、北側に隣接する阿武町の有権者の 55%以上が反対運動に立ち上がった。過疎化を食い止める独自の行政を選んで萩市と合併しなかった阿武町ではUターン、Iターンでようやく町再生の兆しが出てきていた。ミサイル基地は逆に若者を地元から離れさせ、町には何のメリットもないと花田町長は首尾一貫して反対の意思を示していた²⁾。

さらに深刻な問題は SM-3 が発射されるとブースターが基地周辺の居住地、農地に落下する危険

があることである。敵から守るためと言っても住民は後ろから鉄砲を撃たれる状態である。イージス・アショアの導入を政府が決めた前後も、地元で説明に来るまでブースター落下は検討事項になかったようだ。

住民説明会で質問され、自治体からの文書照会があつてから回答を用意している。最初はあらかじめ決めた落下地点に落ちるようにブースター切り離しのときに向きを変えろと言われ、風や空気抵抗の影響を指摘されると、上空の風速風向を計測しあらかじめシミュレーションしておくから大丈夫

と、首長宛の大臣印の押された回答書で約束した。このような安易な対処は出来ないとアメリカ側から法外な改造費用と年月を吹っ掛けられ、わが国の陸上にイージスを設置することの断念に追いやられた。住民と市民・科学者運動の力が生んだオウンゴールといえよう。

4. ミサイル基地は何を守る

図2の説明で述べたように、秋田と萩のイージス・アショアは太平洋上の米軍基地を防衛するには有効かも知れない。加えて、レーダー機種選定にも疑念が述べられている³⁾。ロッキード・マーティン社製の SPY-7 が採用となったが、これは米本土防衛用に太平洋域に設置をめざして開発中のレーダーである。一方、採用されなかった SPY-6 は海軍のイージス・システムとして実戦配備が先行している完成品である。SPY-7 の開発費を分担することが期待されているのかも知れない。

国家同士が相手を信頼せず、軍事増強を進めても、必ずそれを上回る武器が現れる。核ミサイル防衛は相手にミサイルを発射させる動機をもたせない国際関係の確立こそが確実な道である。

引用文献

- 1) 山口の科学者：「レーダー・ミサイル基地設置の影響と問題点」JSA 山口支部(2020.6)
- 2) 外山英昭：「住民・市民の熱き思いと科学の力でイージス・アショア配備計画を撤回させた」『季刊人権問題』62、1-28 (2020.11)
- 3) 時事ドットコム：「レーダー選定、くすぶる異論」(2020.11.2)